

上野国の歌(2)

北川 和秀

【伊香保】

(前回のつづき)

④伊香保ろの八尺やさかの井手みでに立つ虹のじの頭あらはろまでもさ寝をさ寝てば (三四一四) 上野東歌

《参考》

a 虹 にじ○東国の小児このじと云。(『物類称呼』巻一「天地」)

* 『物類称呼』は江戸時代中期の安永四年(一七七五)にできた方言集

b のじ 虹 (『群馬県邑楽郡誌』前編附録「二、方言」) 大正六年(一九一七)刊

c ノジと発音するのは注者の少年の頃にも村裡には行はれた。

(土屋文明『万葉集私注』三四一四番歌の語釈)

* 土屋文明氏は、明治二十三年(一八九〇)西群馬郡上郊かみさと村保渡田ほどた生。

⑤上毛野伊香保の沼ぬに植こゑ小水葱こなぎかく恋こひむとや種こ求めなけむ (三四一五)

【利根川】

○利根川の川瀬たも知らたず直渡り波なにあふたのす会あへる君きかも (三四一三) 上野東歌

【子持山】

○子持山こも若鷄わか冠木かの黄葉もつまで寝なもと吾わは思もふ汝なは何あどか思もふ (三四九四) 未勘国東歌

【沢渡】

○左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（三五四〇）未勘国東歌

※沢渡神社境内の万葉歌碑について

○（文政十一年八月十二日）君ノ尾よりもなほ谷川にそひて一里あまり出れば、伊香保より直に草津へかよふ道にいづ。板橋をわたり右にたどりて沢渡の出湯にいづ。四万より四里半とぞいふなる。こゝにもゆあみする人つどへり。伊香保より草津へのゆきかひにはかならずやどる所なれば、夜はわきてにぎはへり。薬師のみ堂にまうでゝ見れば、万葉集なる

左和多里能手児伊由伎安比安可故麻我

安我伎乎波夜美許等登波受伎奴

と云歌を石にゑりて立たり。こゝと定たるはたしかなる證ありてにや。

（富田永世『上毛温泉廻』文政十一年九月一日成）1828

ここに記されている歌碑がそれとすれば、この歌碑は文政十一年（一八二八）にはすでに建っていたことになる。

【久路保】

○上毛野久路保の嶺ろの葛葉がた愛しけ子らにいや離り来も（三四一二）

【乎度・小野】

①上毛野乎度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして（三四〇五）上野東歌

②上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに（同或本）上野東歌

【阿蘇】

①上毛野阿蘇の真麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ（三四〇四）

②上毛野阿蘇山葛野を広み延ひにしものをあぜか絶えせむ（三四三四）

《参考》

○下毛野阿蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ（一四・三四二五）

古注釈における「安蘇」についての記述

a 『八雲御抄』『勅撰名所集』にも上野の名所とみゆ。

(北村季吟『万葉集拾穂抄』1686)

b 下野に安蘇郡あれど、これは上野なればそこにはあらぬなり。

(契沖『万葉代匠記』初稿本) 1687

c 下野ニハ安蘇郡アレド、上野ニハ何レノ郡ニ安蘇ト云所ノ有ニカ。和名集ニハ見エズ。

(契沖『万葉代匠記』精撰本) 1690

d 下野にある郡の名也。古は上野に属せしか。又上野にも郷の内にある歟。何れにまれあそは地名也。同じ地名なれ共まそと云ふ言を求めん為のあそ也。又あそと云ふ詞はあさと云詞なれば、是等の意をこめて読めるなるべし。

(荷田春満『万葉集童蒙抄』) 1733頃

e 下野国、安蘇郡、あそ山、あその川原、あそ村などよめり。上野国には、きこえず、誤しもの也。○十四丁ウ志母都気努、安素乃河泊良欲とあれば、下野にたがひなし。○十六丁可美都家野安蘇山とあり、上野に、あそ山なければ、下野の誤也。

(頭注 上毛下毛元来一国なれば混してよみしなるべし)

(高井宣風『万葉集残考』) 1816

f (頭注 下野安蘇郡、もとはこの上野にもわたれる地には非るか。)

(鹿持雅澄『万葉集古義』) 1842

g 安蘇は今甘楽郡に宇田村と云在、其村に小山あり、今峰山と云【稻荷を祭て今寺有】其山を往古より安蘇岡山と云ひ来れるを、今朝岡と書くと鈴木千本云り、然らば宇田の宇も苧の移りたるにて、今も甘楽郡は、苧を多く作り、上野麻とて、いと名高く殊に此宇田の辺り多しといへば、安蘇は此辺りと定むべし【但し下に安蘇山つづらとよめる安蘇は箕輪のほとりをいふといへば別か】(橋本直香『上野歌解』) 1855頃

h 安蘇山は里人云、今の相馬嶽の事にて【安曾と相馬と音ちかし】其辺りより箕輪のわたりをかけて安蘇の荘と云ふとぞ、……箕輪軍記に北は安曾山相馬の麓と有るは其名の二つに成しにてすべて此ほとりを安曾と云しと見えたり。

(橋本直香『上野歌解』) 1855頃